

神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究 (Ⅲ)

—その歩みと今後の視点—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

6. 国分僧寺・国分尼寺の研究

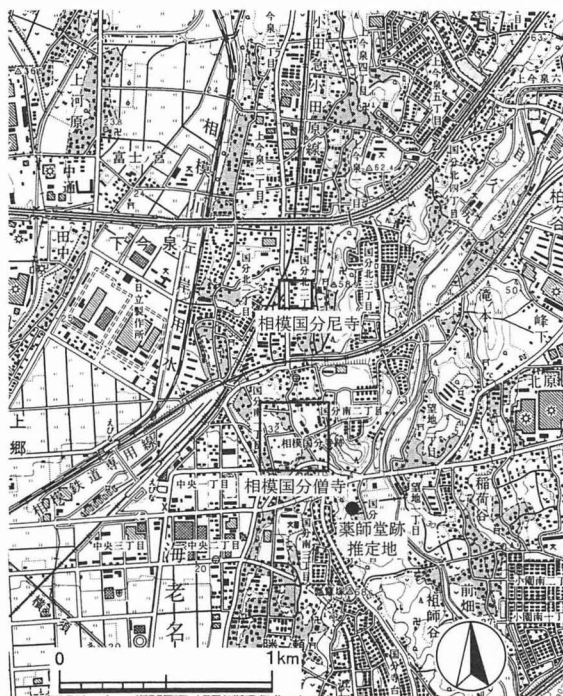
はじめに

相模国分寺の所在については、古くから海老名市国分周辺に推定され、江戸時代末に編纂された『新編相模風土記稿』(1841)にも、東光院医王院国分寺の北方に「…伽藍の礎石相今去ること二町許にあり、礎石の大きさ六七尺、田畝の間に散在す。又尼寺の廢跡は、礎石より七八町を隔つ…」と記録している。また、明治期から幾多の先人により、国分僧寺尼寺の伽藍配置について表面採集や観察・地形・地名考等からさまざまな研究がなされてきた。1965年には国分僧寺の予備調査が行われ、1966・67年の発掘調査で伽藍配置についてある程度明らかになった。

国分尼寺については、埋蔵文化財調査は行われないうまま宅地化が進んだが、1988年に相模国分寺遺跡調査会が発足し、金堂跡周辺の発掘調査が実施された。

その後国分僧寺尼寺の史跡整備事業に伴う調査が行われ、新たな発見や多くの研究成果が発表されている。

ここでは、相模国分二寺の遺構や出土遺物等の研究成果、また、初期国分寺に関する論点等を概略ではあるが見ていきたい。



第1図 遺跡位置図

研究の回顧

(1) 遺構からみた伽藍配置の研究

海老名村(現海老名市)の小学校校長中山毎吉氏は、明治から大正期に精力的に出土瓦の収集に努め、残された礎石の配置などを詳細に調査した。その結果、国分僧寺について第一号～第五号の遺構を確認し、第一号を金堂、第二号を塔、第三号を講堂の跡と推定した。また、第四号や第五号の礎石や硬化面の存在からこれらを取り囲む回廊の存在を示した。さらに、回廊の東・西・北に硬化面があることから、僧坊・鐘楼を復元した。こうして、西に塔、東に南面する金堂、北に講堂、それらを取り囲む回廊の存在から、国分寺は法隆寺式伽藍配置と結論づけ、このことから天平以前に創建されたものと推定した(中山ほか1924)。

一方沼田頼輔氏は大住国府の所在を平塚に求めたことと、伽藍配置が法隆寺式であることから、相模国分寺の創建を国分寺建立の詔勅以前とし、豪族により建立されたものを国分寺に転用したと考えた（沼田1927）。

1927～30年にかけて現地の測量調査を実施した早稲田大学の建築史家田辺泰氏は、堂塔の礎石の配置とその間隔の寸法から、建築にあたっては天平尺が用いられたと考えられること、出土瓦も天平以前のものとは考えられないことなどから、創建は741（天平13）年以前とは考えられないとした（田辺1931）。

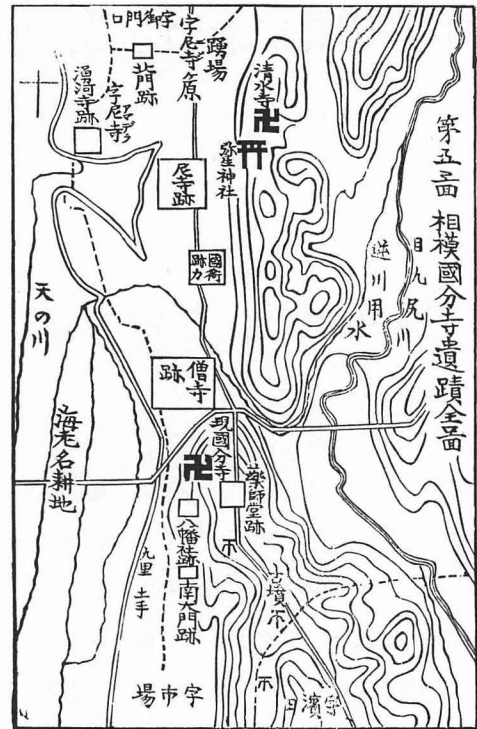
こうして、残存する礎石等による表面観察等により、国分僧寺の伽藍配置はある程度明らかになってきたが、本格的な埋蔵文化財調査は行われることのないまま、昭和30年代に入ると宅地開発が遺跡周辺にも迫ってきた。

1965年神奈川県と海老名市（現海老名市）により、予備調査が実施され、翌1966年・67年の2度にわたり、文化財保護委員会（現文化庁）が発掘調査を実施した。これらの発掘調査の成果により、国分僧寺は、中門から北面と南面には回廊、東面には築地塀が巡り、北側で講堂に取りつき、内部には東側に金堂、西側に塔が配置される、法隆寺式伽藍配置であることが確認された。また、講堂の北側に最初は礎石建物であったものが、掘立柱建物に建て替えられた遺構が確認され、僧房と推定した（大岡1967・坪井1985）。

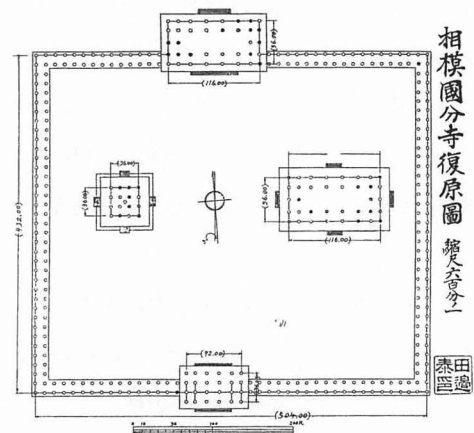
國平健三氏は法隆寺式伽藍配置であること、近年の発掘調査の成果で中門の東回廊に近接して奈良時代初頭の堅穴住居址が確認されたことから、寺院造営事業はそれより後であったとし、豪族の氏寺が国分寺に転用したとする説を否定し、相模国分僧寺が最初から金光明四天王護国之寺として建立されたと考えられるとした。また、国分僧寺の塔跡は切石積基壇外装から後に北辺のみ玉石積基壇外装に修理されていること、基壇周辺で3面の整地層が確認されていること、僧坊跡は2時期の掘立柱式建物から最終的に礎石建物へと3度の建替えがなされたとされること、検出された3条の溝状遺構は僧寺の伽藍地を区画した溝であると思われることから、補修・再建を指摘している（國平1998）。

また須田誠氏は、遺構から3時期あったことはほぼ確実であったとし、さらに塔跡周辺部の整地層中から出土した金銅製と遺構上から出土した銅製水煙とを検討し、水煙についても「鑄造→補修→再鑄造」の3段階を想定している（須田2000）。

国分尼寺については、前述した中山氏は礎石配置を、第一号～第六号の遺構とし、第一号を金堂、第二号



第2図 国分二寺跡と周辺の状況
(相模国分寺志より)



第3図 相模国分寺復原図（建築雑誌より）

を講堂、第三号を中門、第四号を西塔、第五号を鼓(鐘)楼、第六号を回廊の跡と考え、大安寺式伽藍配置を推定した(中山ほか1924)。

発掘調査の成果から、伽藍中軸線上に中門・金堂・講堂が、金堂と講堂間の左右に経蔵・鐘楼が配置され、廻廊が講堂にとりつく国分寺式伽藍配置が復原されているが、須田氏は伽藍地区区画溝の掘り直しや金堂雨落石敷の下層に基壇外装の切石破片が混入していること等から僧寺と同様3時期の区分を指摘している(須田2000)。また、國平氏は金堂は礎石建物が焼失した後、掘立柱建物が再建されその基壇は玉石積基壇であったとし、創建当初は切石積基壇と見られることから、その改修時期は僧寺の塔基壇の改修時期と同じころとしている(國平1998)。



第4図 調査地点と伽藍復原(海老名市史より)

(2) 出土遺物からみた研究

一出土瓦を中心として創建年代を考える一

須田氏は僧寺の瓦をⅠ・Ⅱ類、尼寺の瓦をⅠ～Ⅲ類に分類しているが、遺構との関係や年代についての詳細な検討は今後の課題としている(須田2000)。

國平氏は僧寺の軒瓦文様の変遷をⅠ～Ⅲ期に分類し、Ⅰ期を創建期として、からさわ瓦窯系・公郷瓦窯系・乗越瓦窯系のものが使用され、Ⅱ期は不明、Ⅲ期を再建期として瓦尾根瓦窯や南多摩窯系の瓦が使用されたとした。Ⅰ期の造瓦技法は「桶巻き作り」と「一枚作り」の両技法のものが用いられていることや、軒瓦の文様は8世紀中葉のものと考えられること等から國平氏は僧寺については750年代にはある程度完成していたとの見解を示している。また、尼寺の軒丸・軒平瓦の文様瓦は瓦尾根窯系のもので占められているとし変遷をⅠ～Ⅲ期に分類した。それぞれの時期については土器の年代などから、創建期については瓦尾根窯との検討から8世紀第4四半期とし、Ⅱ期を9世紀第2四半期、Ⅲ期を9世紀第3四半期としている(國平1990・91・98)。

河野一也氏は、僧寺の創建段階の瓦は公郷瓦窯系のものが主体であるが、からさわ瓦窯・乗越瓦窯系のものが含まれていることから、創建期を天平末年から8世紀第3四半期に求めた。また、再建期を弘仁10(819)年から9世紀第2四半期として瓦尾根瓦窯の瓦が使用され、補修期を貞観15(873)年以降として南多摩窯群から供給されたとの見解を示している。尼寺については創建瓦窯は不明であるが、からさわ瓦窯系・乗越瓦窯系の瓦が出土していることから、僧寺にそれほど遅れることなく造営が開始されたとしている(河野1994・2000)。

(3) 初期国分寺についての研究—千代寺院跡(千代廃寺)を中心として—

一方、初期国分寺を海老名ではなく、小田原市千代に所在する千代寺院跡(千代廃寺)する見解がある。木下良氏は歴史地理学の視点から相模国府所在地の検討を進め、東大寺式伽藍配置をもつとされていた千代廃寺を当初の国分寺であるとした(木下1974)。

また、前場幸治氏は、千代廃寺の出土瓦が天平期のものであること、千代廃寺が所在する一帯に上府中・下府中の村名が存在したこと、周辺に国府津の地名がみられることから、初期相模国分寺を海老名ではなく小田原市の千代廃寺とした(前場1980・84)。

しかし、千代寺院跡の伽藍配置が、過去の発掘調査の成果等から法隆寺式であると推定(岡本1998・1999)されることや、出土瓦の検証から創建期が霊亀年間から天平初年とする見解(河野1993)などから、千代廃寺は在地豪族の氏寺として始まり、郡の寺として展開された(國平1991)と理解されてきており、国分寺としての認識は薄くなってきている。

今後の課題と展望

相模国分僧寺尼寺については、すべてが調査されその全貌が明らかになった訳ではない。調査自体が開発行為に伴うものや、史跡整備事業に伴うもので小規模な発掘調査の積み重ねでここまでの成果が得られたものである。

その中で伽藍についてはある程度明らかになっており、その復原も提示されている。また、国分寺周辺に広がる遺跡の調査も進められ、国分尼寺北方遺跡第7次調査地点の1号掘立柱建物跡からは瓦尾根瓦窯系の丸瓦や「法華寺」「寺」の墨書土器が出土し、馬首埋納土坑が検出され、第2次調査地点からも墨書土器や海老錠が出土した。このことからこの遺跡が尼寺の寺域内と推定される。今後は、国分僧寺尼寺の寺域についての検討、出土遺物のさらなる検証等が求められることになるだろう。

また、『類聚国史』には弘仁10(819)年2月と8月の2度にわたる国分寺罹災の記載、『日本三代実録』には元慶2(878)年9月の地震被害と、元慶5(881)年に再建を願い出て勅許されているという記載がある。さらに、『日本三代実録』に貞観15(873)年に国分尼寺を漢河寺に移し、元慶5(881)年に元の国分尼寺に戻すことが許可されている記載がある。この漢河寺については不明なことが多く、その所在もはっきりとはしていない。この問題も含め文献史料と発掘調査で得られた資料を検討すること、さらには歴史地理学や民俗学など周辺分野からの視点も必要であろう。

国分寺を考える上で他の古代寺院や相模国府、郡衙に対する研究も切り離しては考えられないはずである。今後こうしたさまざまな研究の成果から新たなアプローチが試みられることを期待したい。

(葉山俊章)

追記

本号で論述する寺院関係は富永が担当していたが2000年4月より葉山が当研究プロジェクトに加わったため、国分寺関係を葉山が、豪族の寺と山寺、堂を富永が担当した。

引用・参考文献

中山毎吉ほか 1924.12『相模国分寺志』 海老名村

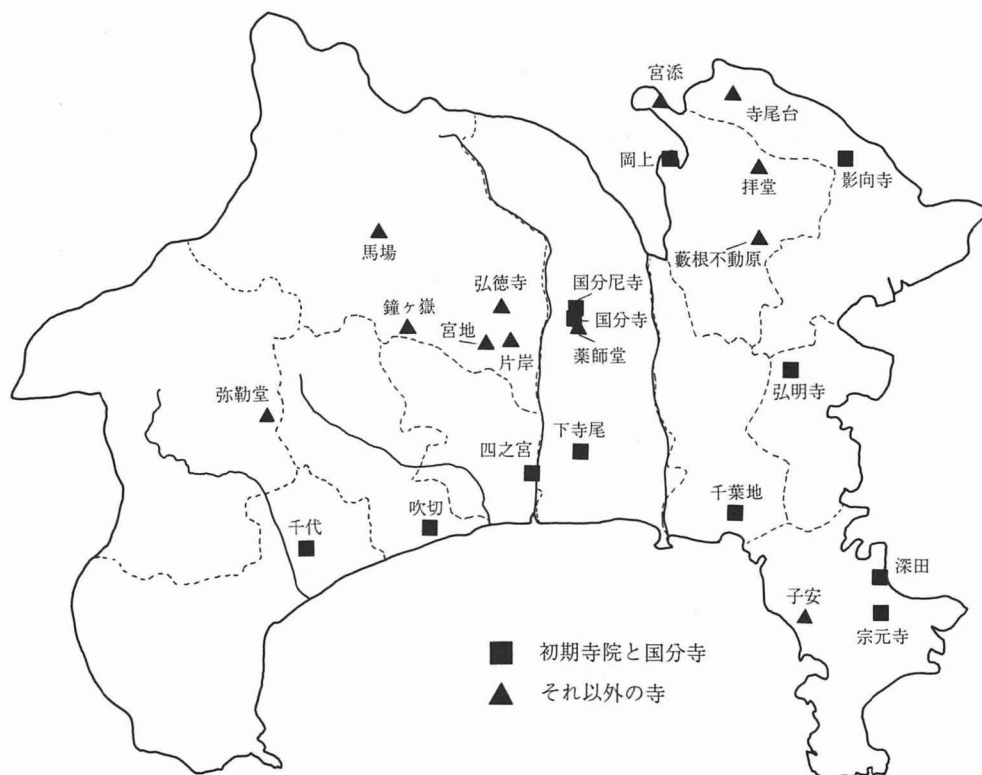
- 沼田頼輔 1927.5 「相模国分寺に就いての一考察」『史蹟名勝天然記念物』2-5（1975『日本考古学選集5』 築地書館より）
- 田辺 泰 1931.7 「相模国分寺建築論」『建築雑誌』 早稲田大学建築学会
- 大岡 実 1967.5 「史跡相模国分寺跡の発掘」『月刊文化財』44 文化庁文化財保護部
- 木下 良 1974.5 「相模国府の所在について」『人文研究』59 神奈川大学人文学会
- 前場幸治 1980.10 『古瓦を追って』 私家版
- 前場幸治 1984.3 『国分寺古瓦拓本集 巻1 相模編』 国分寺古瓦拓本集刊行会
- 坪井清足 1985.10 「相模国分寺を掘る」『飛鳥の寺と国分寺』 岩波書店
- 滝澤 亮ほか 1990.3 『相模国分寺関連遺跡』1・2 海老名市教育委員会
- 滝澤 亮ほか 1990.3 『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査』Ⅰ 海老名市教育委員会
- 國平健三 1990.3 『初期相模国府の所在について（上）』『えびなの歴史』1
- 國平健三 1991.3 『初期相模国府の所在について（下）』『えびなの歴史』2
- 滝澤 亮ほか 1992.3 『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査』Ⅱ 海老名市教育委員会
- 長谷川厚 1993.3 「相模国府と国分寺の所在について」『かながわの考古学』3
- 河野一也 1993.5 「奈良時代寺院成立の一端について4-相模足下郡千代廃寺の古瓦を中心として」『神奈川考古』29号
- 河野一也 1994.11 「相模国分寺」『シンポジウム関東の国分寺』 関東古瓦研究会
- 伊東秀吉ほか 1996.3 『神奈川県海老名市 国分尼寺北方遺跡-第7次・第8次調査-』 住宅・都市整備公団 国分尼寺北方遺跡調査団
- 海老名市 1998.3 『海老名市史 1 資料編 原始・古代』
- 岡本孝之 1998.5 「千代廃寺跡の研究史的復元」『神奈川考古』第34号
- 岡本孝之 1999.3 「千代廃寺跡の再検討」『小田原市郷土文化館研究報告』35
- 須田 誠 2000.3 「相模国分寺・国分尼寺跡」『神奈川県考古学会 考古学講座 かながわの古代寺院』
- 河野一也 2000.3 「相模の古代寺院と瓦」『神奈川県考古学会 考古学講座 かながわの古代寺院』
- 河野一也 2001.3 「「かながわの古代寺院」研究成果と課題」『神奈川県考古学会 考古学講座 成果集 かながわの古代寺院 研究の成果と課題』

7. 豪族の寺院と山寺、堂

白鳳期～奈良時代前期における地方豪族の寺院

白鳳期から奈良時代前期に地方豪族が建立した寺院が神奈川県においても確認されている。それについては不確定なものも含めると相模においては小田原市千代廃寺、大磯町吹切遺跡、茅ヶ崎市下寺尾廃寺、鎌倉市千葉地廃寺、横須賀市宗元寺、横須賀市深田廃寺があり、武蔵国域では横浜市弘明寺、川崎市影向寺、川崎市岡上廃堂などがある。平塚市下ノ郷廃寺については寺院の可能性が考えられているが異論もあり、時期も未確定である。寺院ごとにその研究史と課題を概観してみたい。

小田原市千代廃寺については大正年間から採集・踏査が始まり、多くの研究者が研究を重ねている。近年では前場幸治氏（前場1980）、清水信行氏（清水ほか1989）、國平健三氏（國平1990）、河野一也氏（河野1993）、岡本孝之氏（岡本1998）らが考察している。礎石の点在や基壇状の土盛りの存在から寺院の存在は間違いなが、伽藍配置については東大寺式と法隆寺式の二見解に分かれている。発掘調査については1958年に県教育委員会と小田原市教育委員会が、1960年には赤星直忠氏と県教育委員会の発掘が推定伽藍中心部を調査したがその内容は未だに報告されていない。瓦、灯明皿、瓦塔、磚仏、螺髪、蓮弁状土製品などが出土しているが、瓦について創建期と補修期のものがあると指摘されている。創建期の瓦については松田町のからさわ瓦窯で生産されたものであるが、補修期の瓦は生産窯は断定されていない。創建期についてはかつては赤星らにより奈良時代後半と推定されていたが、瓦研究の進展により近年では河野や清水らが奈良時代前期の年代観を提示している。初期国分寺にあてる考え方については前章で触れられているとおりである。



第5図 神奈川県寺院遺跡位置図

大磯町の吹切遺跡については千代廃寺の供給元であるからさわ瓦窯の瓦が出土することから寺院の可能性があるが（赤星1979、河野1997、清水1997等）礎石は確認されておらず、発掘調査も実施されていない。寺院かどうかは今後の課題である。

茅ヶ崎市下寺尾廃寺については1940～1950年代に鶴田榮太郎氏や石野瑛氏の採集・踏査がなされ、先駆的な調査となったが、発掘調査が行われたのは1978年に市史編纂事業として岡本勇氏らによってである（岡本1978）。岡本勇氏や赤星直忠氏は出土瓦などから平安時代の寺院としたが河野一也氏は白鳳時代の可能性を考えた（河野ほか1991）。1989年以降は推定寺域周辺で茅ヶ崎市教育委員会による部分的な発掘調査が行われ、2001年には大型の瓦溜まりを検出している。また1997年には市史編纂事業の発掘調査などで出土した瓦等を整理し、報告書作成が岡本孝之氏を代表とする下寺尾寺院跡研究会と茅ヶ崎市教育委員会によってなされた（岡本ほか1997）。それによると下寺尾廃寺は7世紀後半の寺院とするもので法起寺式とする伽藍配置の復元も行っている。簡単に研究史をさらったが下寺尾廃寺に関しては発掘調査によっても明確な建物の基壇が未確認なことから軒丸瓦・軒平瓦がほとんどないこと（創建時より新しい軒丸瓦は採集されている）は大きな問題点である。平瓦の調整から神奈川県最古の寺院とする河野の考え方もあるがまだ確定的とは言い難い。礎石などは元位置のものは少ないが、多く確認されており、本格的寺院であると推定されるが、年代・規模・性格・伽藍配置等はいまだ検討段階であるといえよう。

平塚市の四之宮廃寺（下ノ郷廃寺）については1960年代の日野一郎氏の調査と研究（日野1967）があるが、試掘調査などから平安時代の講堂を推定したものであった。これについては近年、明石新氏・若林勝司氏が再検討し（明石ほか2000）、日野の調査によって検出された根石が古代のものとは言い難い点と仏教的遺物の少なさからむしろ寺院ではなく、国司館の可能性を考えている。四之宮廃寺は大きな問題を含んでおり、推定平塚国府域に近接し、国府との関わりが予想される。もし古代寺院とすれば「郡寺」か地方氏族の寺院なのかまたは「国分寺」「国府付属寺院」なのかという問題にも発展する。四之宮廃寺の調査地点は別にしても推定国府域内の調査では多くの仏教関連遺物や奈良時代の瓦が出土しているがこれが郡衙・国衙関連の遺物なのか検討は必要だろう。なお近隣にある高林寺についても別の古代寺院という考え方がある。

鎌倉市千葉地廃寺は鎌倉郡衙（今小路西遺跡）の北に存在が推定されるもので、その存在の確認は1980年代からとかなり新しい。千葉地遺跡、千葉地東遺跡、今小路西遺跡などで多量の古代瓦が出土し、寺院の推定がされたものである。これについては國平健三氏・河野一也氏の研究（國平ほか1988）があるが、瓦から7世紀末～8世紀初頭の創建が推定されている。寺院の遺構は発見されておらず、中世の造成で消滅した可能性がある。位置的には郡衙のすぐ近くでいわゆる「郡寺」「郡名寺院」の可能性はある。

横須賀市宗元寺は現在かなりの部分が宅地の中にあり、礎石は一つも遺存していないが、かつては礎石も十以上散在していたという。宗元寺の本格的な研究を始めたのは赤星直忠氏であり（赤星1935）、大正年間、宗元寺に隣接する横須賀中学校在学中から礎石の位置図を作成していた。それから研究は生涯を通じて行われたが、赤星は瓦の分布や礎石の位置から伽藍を法隆寺式または法起寺式とし、主要な瓦当文様である忍冬蓮華文軒丸瓦から時期は奈良時代前期または後期とした。河野一也氏は1990年（河野1990）および1997年（河野1997）宗元寺と周辺瓦窯の瓦の研究からその供給関係を明らかにし、創建時期を7世紀第4四半期から8世紀第1四半期までとした。さらに伽藍配置についても赤星作成の図面から違う結論を出し、四天王寺式とした。宗元寺の忍冬蓮華文軒丸瓦については上原真人氏（上原1998）や岡本東三氏（岡本1997）の7世紀中頃までさかのぼらせる説もあり、時期的に微妙である。発掘調査に関しては皆無であり、宅地化の関係で

今後の調査もかなり困難である。伽藍配置や規模については今後も決着はつきそうもない。

横須賀市深田廃寺については、宗元寺より約2.5キロメートル北方に位置するが、遺跡自体は完全に過去の開発により消滅している。出土品である瓦から赤星直忠氏と河野一也氏が研究をしている。特に河野は瓦の分析から供給元が法塔瓦窯と乗越瓦窯と推定し、複数の系統があることから瓦窯ではなく、寺院跡とした。創建時は8世紀前半と推定している。このように数キロ離れたところに二寺院が建立される理由についてはあまり議論されていない。

横浜市弘明寺は石野瑛氏や赤星直忠氏、岡本勇氏らが古代瓦が出土することを報告しており、時期的には奈良時代後半から平安時代初期の瓦と考えていた。岡本孝之氏らは改めて瓦の資料紹介をするともに平瓦に桶巻きづくり格子叩き目のものが含まれることから創建を7世紀末～8世紀初頭とした（岡本ほか2001）。また付近に久良岐郡の郡衙もあると推論し、「郡寺」「郡名寺院」を伺わせる想定をしている。興味深い類例だがまだ検討段階の資料であり、規模、性格、創建年代も今後の資料増加で確立していくことだろう。

川崎市影向寺は近年発掘調査が進んでいる橘樹郡衙に隣接し、現在も法灯を今に伝える影向寺境内を中心に寺域が推定されている。大正年間から影向石（塔心礎）や瓦の考察があり、戦後では古江亮仁氏が瓦の中に奈良時代前半にさかのぼる資料があると指摘している。昭和50年代からは川崎市教育委員会主体の影向寺文化財総合調査に伴って試掘調査が行われ、影向石近くに塔基壇を、現薬師堂下には金堂基壇を検出した。また伽藍建立以前に大型掘立柱建物群が存在することが明らかになり、影向寺の前史・創建の事情を考えさせる資料となった（竹石健二ほか1981）。近年改めて影向寺について再検討した河合英夫氏（河合2000）は金堂基壇を講堂と推定し、塔の西に金堂が存在したと考察した。伽藍配置は河合の推定では法起寺式となる。また創建年代についても河合は瓦当文様が山田寺系の素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦であることから7世紀第4四半期とし、創建の背景も評制段階にさかのぼり、天武朝以降の仏教振興政策を契機に郡司層である地方首長が建立したと考えた。また2000年に公表された「无射志国荏原評」文字瓦でも国評併記の形式から7世紀第4四半期の時期が想定されている。

川崎市岡上廃堂は内藤政恒氏と古江亮仁氏により古瓦が採集されることが報告され（内藤ほか1954）、平安時代初期の寺院と推定した。赤星直忠氏は礎石がないことや焼土塊が出土したことから瓦窯説を唱えたが、結論には至らなかった。河合英夫氏が再検討し（河合1992）、数百メートル離れた三輪瓦窯址を近年発掘調査した結果、岡上廃堂の瓦を生産していたことが判明し、寺院であることを明確にした。その上で三輪瓦窯址と岡上廃堂から桶巻きづくりの瓦があることを指摘し、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦と合わせて8世紀前半の創建期を予想し、8世紀の中頃～後半に一枚づくりの瓦と剣菱文軒丸瓦が導入されたと考えた。

白鳳期から奈良時代前期に創建された地方豪族の寺院について全体的な課題を考えてみたい。

今まで概観した神奈川県内の寺院では郡衙と近接し、「郡寺」「郡名寺院」に近いものがいくつかある。千代廃寺、千葉地廃寺、影向寺はほぼそのような性格だろう。宗元寺の属する御浦郡と弘明寺の属する久良岐郡については郡衙の位置が不明確なためなんとも言えないが同様になる可能性は残されている。このようにしてみるとおそらく前記の三寺院は造立者・庇護者は郡司であり、神奈川の初期寺院の半数近くが郡司層と深く関わった寺院と推定できる。これは他県の傾向と一致し、例えば「出雲風土記」に記載された出雲国の十一寺のうち、建立者の5人は郡司であり、その他の建立者も郡司の一族が多くを占めている可能性が高い（倉住1999）。また「日本霊異記」でも百済戦役の頃に郡司が郡の名を冠した寺院を建立する話が見られる。他県でも郡衙の近くに寺院が存在する例は少なくなく、郡の名を冠した「郡名寺院」である可能性

がある。しかしそれはあくまで郡司が本拠地に追善供養と国家政策への追随、勢力誇示などの点から寺院を造立したと考えられ、国分寺のように制度的に郡ごとに一寺が設けられていたという説は古代史では有力とは言いがたい。それは寺院の無い郡が他県でも多く存在することからも伺え、神奈川でも初期寺院が愛甲郡、足柄上郡には今のところ確認できていない。寺院を建立できるような有力豪族が郡司であることが多かったためであり、郡に課せられた義務ということではないだろう。

白鳳期から奈良時代初頭に地方豪族の古代寺院建立が集中することは近年の古代寺院研究ではごく常識になっており、神奈川も同様の傾向を示している。創建時期についてかつては下寺尾廃寺が平安時代、宗元寺が奈良時代後期、弘明寺が奈良時代後半から平安時代前期、影向寺が奈良時代とされていたのに近年ではそれぞれ白鳳期から奈良時代初頭に変更されている。また岡上廃堂の創建期も平安時代初期だったものが奈良時代前半に見直された。これは瓦の研究が進展し、桶巻きづくりの瓦の時期が古いことが判明したことによる。また過去の研究では地方における古代寺院建立が国分寺を契機としたという考え方が重視されていたが、それが変化したことにもよるだろう。

瓦については従来の瓦当文様中心の研究から平瓦・丸瓦の調整・胎土・生産窯推定から時期を考える手法へ発展しつつあり、神奈川では特に河野一也氏の功績が著しい。これは下寺尾廃寺のように大量の瓦が出土しつつも軒丸・軒平瓦が全くない寺院では特に有効であり、発掘例のない寺院においても採集した平瓦・丸瓦から創建時期や生産窯系統が推定できることは重要な視点をもつことになる。河野は2000年の特別講演にて相模の古代寺院の瓦から見た創建年代を総括している。それによると相模の古代寺院は下寺尾廃寺を初現とし、千葉地廃寺、宗元寺の順であり、その後、深田廃寺、吹切遺跡、千代廃寺がほぼ同時期に建立されたという（講座成果集では千代廃寺がやや引き上げられている）。この推論の当否は議論の分かれるところであり、造瓦方法や系統の組合せでどこまで細かく年代をしばりこめるのかは大きな課題である。いずれにせよ古瓦研究のさらなる進展と共に現地の発掘調査が進むことにより新たな検討がなされていくことだろう。

奈良時代中葉から平安時代の寺院と山寺について

国分寺建立以後は地方豪族による新たな大規模寺院建立は減少し、これまでとは違った形態の寺院が建立されるようになる。しかしながらこの時期における神奈川県の古代寺院の研究はやや低調で、初期古代寺院研究に重点がおかれていることと対照的である。しかしながら2000年の神奈川考古学会考古学講座における岡本孝之氏の古代瓦の集成からみてもこの時期の寺院が相当数まだ隠されていることが伺える。可能性のある遺跡として川崎市の寺尾台廃堂、海老名市薬師堂、厚木市の片岸遺跡（一乗尼寺）、飯山廃寺、松田町の弥勒寺、大磯町国府本郷中丸遺跡、横須賀市の子安寺、藤沢市固館遺跡などがあるが、寺院とも確定していないものも多い。

川崎市の寺尾台廃堂については1951年に発掘調査が行われており、基壇を伴った単堂形式の仏堂が発見されている。報告では（内藤ほか1954）基壇の「葺石」から八角堂を復元しているが、建築史学の専門家などと協議した結果だという。瓦も多量に出土しているが剣菱軒丸瓦が武蔵国分寺の瓦と同一系統と考えられることから調査者は平安時代初頭としたが、のちに吉重蔵氏らはこの系統が奈良時代後半のものだと判断している。このような単堂形式で基壇を持つ寺院は今のところ県内では例がないが県外では千葉県小食土廃寺や大塚前遺跡、群馬県戸神諏訪遺跡などが知られており、ひとつの寺院または堂の形式だろう。舌状に飛び出た丘陵上に位置し、三方は50m近い比高差がある崖で「一種の山堂乃至は小山寺」と報告されている。

海老名市薬師堂は国分寺の南東数百メートルに存在していた仏堂跡で1963年未調査のまま開発により消滅した。飯田孝氏がかつての礎石の状況や瓦を紹介しているが（飯田1998）、心礎を中心に庇を含め三間×三間の礎石建物が存在し、付近に瓦溜まりも存在していた。時期的には奈良時代後半と推定されるが国分寺とは別に仏堂が存在していたと考えられ、国分寺の別院だろうか。位置的には見晴らしの良い高地である。

厚木市片岸遺跡（一乗尼寺）は尼寺原と呼ばれる台地上に数点の礎石が点在したもので凸面に縄目がある布目瓦が多く採集されている（飯田ほか1998）。現在は工場敷地となって完全に消滅したが、付近の横穴墓を調査した近年の発掘調査でも斜面から多量の布目瓦と凹花蓮弁文軒丸瓦が出土しており、寺と考えられる。瓦は一枚づくりで、軒丸瓦も退化した形式のもので、奈良時代後半から平安時代初期の寺だろう。

厚木市飯山廃寺は弘徳寺という浄土真宗の寺院の境内で布目瓦が採集されるもので、桶巻きづくりの瓦も含まれる（飯田孝ほか1998）。弘徳寺の寺伝によれば弘徳寺の前身として推古朝の頃に建立された寺があったという。寺伝の真偽はともかく、未確認の古代寺院の可能性はある。

松田町寄の弥勒寺は大形自然石の礎石の残る土壇が存在するが、瓦は出土していない（赤星1979）。吾妻鏡によると元暦元年（1184）の源頼朝の書状に「弥勒寺庄々」という記載があり、弥勒寺の荘園があったことが伺える。建久三年（1192）北条政子が産気づくと頼朝は国内の社寺に誦経を修めさせたが、その十五の寺院に「弥勒寺」も含まれる。四方を山に囲まれた山里であり、瓦を用いない寺が存在していたのだろうか。

大磯町国府本郷中丸遺跡は意外と知られていないが、石野瑛氏が国府に関連した寺院跡として礎石の配置を戦前に記録している（石野1936）。瓦は採集されておらず、吹切遺跡とは数百メートル離れている。

横須賀市子安寺は子安山山頂の畑地に布目瓦が採集されたもので、瓦窯の説もあるが、かなり高地にあるため寺院と考えた方がよいだろう（赤星1979等）。見晴らしの良い場所に建立された山寺に近い例だろうか。

藤沢市の固館遺跡は蓮華文軒丸瓦と布目瓦が採集されており、寺の可能性はある（赤星1979）。

以上概要を記したが、発掘調査例が少ないので明確には言い難いが奈良時代後半～平安時代前期になると寺院の規模が小さいものが多くなっているようである。推定で単堂形式のものも多く、寺尾台廃堂や薬師堂、子安寺のように高台に仏堂を1ないし2棟建てるものがある。後述する「村落内寺院」と区別がつきにくいものも多く、「村落内寺院」の大規模なものと性格的には大差がないのだろう。

山寺については平安時代前期になると密教や修験道の関係から建立が盛んになることが推定され、現在も活動を維持している伊勢原市日向薬師や大山寺などもこの部類であろう。神奈川県の子安寺が考古学的に調査された例は無いが近年厚木市鐘ヶ岳からの多量の出土瓦が紹介されており（富永ほか2000）、南多摩古窯址群の瓦と推定される。平安時代前期の山寺だろう。子安寺なども山寺としてとらえた方がよいのかもしれない。また秦野市草山遺跡に「神坐山寺」の平安時代の墨書土器があるが近隣に山寺があった可能性がある。

村の仏堂

奈良・平安時代の集落内に明らかに仏器、仏具、瓦塔などを伴った掘立柱建物や簡単な礎石建物が存在することが指摘されたのは1980年代千葉県の事例からであった。これらは須田勉氏の命名した「村落内寺院」として認識されたが（須田1985）、より民衆に近い寺として注目された。神奈川県の子安寺については東日本の類例を集めた拙稿（富永1994）によっても集成されたが、清川村馬場遺跡、川崎市宮添遺跡などまだ少数であった。さらにそれに多くの例を追加し、神奈川県独自の集成したのは大坪宣雄氏（大坪2000）であったが、厚木市愛名宮地遺跡や横浜市藪根不動原遺跡などの近年調査の事例が含まれている。大坪の集成の全

てが仏堂かどうか今後検討の余地はあるが、神奈川県にもこのような形式の仏堂が存在したことがわかる。その性格については規模・立地により差があり、郡司クラス、郷長や村落の有力者、富農が自己の氏寺や持仏堂として作った例、有力者が集落の構成員と共に集落のために作った例、集落の構成員が下級僧など共に作った例、集落に近いが僧侶の修行場である例など様々なパターンが想定される。むしろ「堂」では無く「寺院」として扱った方が良いものも含まれており、瓦を部分的に使用する堂もありうる。

（富永樹之）

参考文献

- 赤星直忠 1935「相模宗元寺」『神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書』3
 石野瑛 1936.1「餘綾の相模國府趾」『考古学集録』第三 武相考古会
 内藤政恒ほか 1954.3『川崎市菅寺尾台瓦塚廃堂址調査報告』川崎市教育委員会
 日野一郎 1967.3「平塚市下ノ郷廃寺跡」『日本考古学年報』15
 岡本 勇 1978.10「七堂伽藍を掘る」『茅ヶ崎市史研究』第3号
 赤星直忠 1979.6「古墳時代・古代」『神奈川県史 考古資料』
 前場幸治 1980.10『古瓦を追って』
 竹石健二ほか 1981『影向寺文化財総合調査報告書』川崎市教育委員会
 関東古瓦研究会 1984.9『関東古瓦研究会資料その壱 相模編』
 須田 勉 1985「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』Ⅱ
 清水信行ほか 1989.10『唐沢・河南沢』東海自動車道改築松田町町内遺跡調査会
 國平健三ほか 1988.4「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅰ）」『神奈川考古』第24号
 河野一也 1990.5「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅱ）」『神奈川考古』第26号
 國平健三 1990.3「初期相模国府の所在地について（上）」『えびなの歴史』創刊号
 河野一也ほか 1991.5「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅲ）」『神奈川考古』第27号
 河合英夫 1992.4「岡上廃堂址の年代観について」『多摩考古』第22号
 河野一也 1993.5「奈良時代寺院成立の一端について（Ⅳ）」『神奈川考古』第29号
 富永樹之 1994.5「〔村落内寺院〕の展開（上）」『神奈川考古』第30号
 岡本東三 1996.10『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
 河野一也 1997.2「相模国の初期寺院」『関東の初期寺院』関東古瓦研究会
 清水信行 1997.8「神奈川県」『古代寺院の出現とその背景』埋蔵文化財研究会
 岡本孝之ほか 1997.11『下寺尾寺院跡の研究』茅ヶ崎市教育委員会
 上原真人 1997.5『瓦を読む 歴史発掘11』講談社
 飯田 孝 1998.10「国分寺薬師堂跡およびその付近の遺跡旧観と出土遺物」『えびなの歴史』第10号
 飯田 孝ほか 1998.3『厚木市史 古代資料編2』
 岡本孝之 1998.3「千代寺院跡の研究史的復元」『神奈川考古』第34号
 倉住靖彦 1999.9「地方の古代寺院」『古代を考える 古代寺院』
 河合英夫 2000.3「川崎市影向寺址」『かながわの古代寺院』
 竹沢嘉範 2000.3「横須賀市宗元寺跡」『かながわの古代寺院』
 滝沢 亮ほか 2000.3「小田原市千代寺院跡」『かながわの古代寺院』
 岡本孝之 2000.3「茅ヶ崎市下寺尾寺院跡」『かながわの古代寺院』
 河野一也 2000.3「相模の古代寺院と瓦」『かながわの古代寺院』
 大坪宣雄 2000.3「民間における仏教の受容」『かながわの古代寺院』
 平塚市博物館市史編さん担当 2000.3『平塚市内出土の古瓦』
 富永樹之ほか 2000.5「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集の瓦について」『神奈川考古』第36号
 明石 新ほか 2000.10「平塚市四之宮所在の「下之郷廃寺址」の再検討」『考古論叢かながわ』第8号
 神奈川県考古学会 2001.3『かながわの古代寺院 研究の成果と課題』
 岡本孝之ほか 2001.5「弘明寺の古瓦」『神奈川考古』第37号

8. 在地土器の研究

はじめに

神奈川県とその周辺では奈良・平安時代の土器研究は、開発に伴う大規模な発掘調査が行なわれるようになった1970年代以後大きく進展してきた。近年その研究は全県的な編年研究から地域的な編年研究や在地産の土器が示す地域性とその歴史的な意義の解明に目が向けられるようになっている。

ここでは、奈良・平安時代に旧相模国域で製作された土師器の研究を（１）編年、（２）地域編年、（３）土器様相とその意味、（４）個別土器、という視点から主要論考を概観し、展望にも触れてみたい。なお、八王子市中田遺跡の報告書以前の土師器研究史はすでに詳細に検討されているが（岩崎1967ほか、大屋1990）、ここでは大規模調査の報告書が刊行され始めた1975年以後の旧相模国域内に関する論考を対象とする。

編 年

神奈川県内における奈良・平安時代の在地産土器の研究は個別の大規模遺跡の出土品を対象とした編年研究から始まった。筆者は厚木市鳶尾遺跡出土の土器を遺構内出土の土器の同時性、土師器坏と須恵器杯の形式的な変遷、器形や製作技法の変化、遺構の重複などからの前後関係の確認などの視点から編年を試みた。年代観は共伴した須恵器・灰釉陶器・古銭等から推定したが、灰釉陶器のそれが大きく変わったため、平安時代の年代ずれが大きい（河野1976）。星野達雄氏は神奈川県だけでなく南関東の相模、武蔵、下総を総合的に検討している。相模では海老名市本郷遺跡の出土品を対象として器種ごとの型式分類、遺構内出土土器の組合せと構成器種の違い、遺構の重複等で編年を行なった（星野1977）。本郷遺跡は正式報告書が刊行される以前の論考であり、大勢は誤りがないと思われるが正式な研究成果の公表が待たれる。この後も大規模遺跡の報告書の中で各遺跡出土の編年がなされ、國平健三氏は上浜田遺跡の報告書で遺構内出土の全ての土器を同一時期という前提で編年研究を行なったが、器種ごとの型式学的な検討は鳶尾遺跡と同様なされなかった（國平1979）。なお、上浜田遺跡では鳶尾遺跡に欠落していた7世紀末から8世紀前半の資料が充足された。明石新氏は平塚市中原上宿遺跡の報告書で、平塚市の砂丘地帯の編年を初めて行い、8世紀初頭の土器様相が上浜田遺跡と違う部分があることが明らかになった（明石1981）。小島弘義氏は同じく平塚市の砂丘地帯の調査成果から出土土器を15期に分けた。国府の推定地に該当する遺跡なので7世紀後半から11世紀前半まで土器が確認されている（小島1984・85・90）。長谷川厚氏は宮久保遺跡と草山遺跡の報告書の考察で、土器を器種ごとに型式学的に細かく分類し、各器種の型式からなる組成の変化を捉えて編年を組みⅫ期に分けた（長谷川1990a・c）。各期の様相を組成・型式構成・搬出する須恵器・年代観で説明している。上記以外にも幾つかの大規模な遺跡で出土土器の個別編年が行なわれた（市川1983、田尾1999）が、土器群の変遷の流れに大きな違いはみられない。

國平氏は個別遺跡編年を越えた相模全体を対象とした奈良・平安時代の土器の広域編年の構築を上浜田遺跡・当麻遺跡・鳶尾遺跡から出土した土器を用いて試みた（國平ほか1983）。また、平安時代後半～末を対象として鳶尾遺跡・上浜田遺跡・中原上宿遺跡・四之宮下郷遺跡・四之宮高林寺遺跡・相模原市相原田ノ上遺跡・相原二本松遺跡の出土土器を用いて試みている（國平ほか1986）。いずれも各器種ごとの型式学的な検討を十分に踏まえないで、共伴した土器群の変化を追って編年を作成する方法を採用している。今や蓄積された膨大な資料を用いて、型式学的な検討を踏まえた広域編年を検討する時期に入ったといえる。

奈良・平安時代の土器研究でも実年代の推定は不可欠であるが、県内で土器と共伴した記年銘資料は宮久保遺跡の木簡だけである。この他、相模国分尼寺の被災記録と発掘調査所見との整合性からも年代が推定されてきた（滝澤ほか1988）。これらの資料を除くと神奈川県内で在地産の土器の年代を直接推定できる資料は見つかっていない。従来、実年代の推定は他地域で生産された灰釉陶器や須恵器に多くを頼ってきた。しかし、他地域産の土器や陶器の年代が動いた場合、在地産の土器の年代もそれにつられて無理やり移動させるを得なくなる。自前の年代の定点を持たない弱さであるが、単に記年銘資料の増加を期待するだけでなく、例えば降下火山灰といった新たな視点で研究を深化させる努力が求められている。

地域編年

土器の編年研究の対象地域は旧国単位ぐらいの広い地域が研究視野に入っていたが、各地で調査が数多く実施されるようになると地理的にまとまる範囲や数郡の範囲の広さでの土器群の様相の違いが、例えば高倉郡の北部と南部、あるいは三浦半島域とそれを除いた旧相模国域といった地域で明らかになってきた。

三浦半島における奈良・平安時代の土器研究は個別遺跡ごとの出土土器の研究を基に、まず、三浦半島産のロクロ土師器の研究が行なわれた。長谷川氏ほかは横須賀市小矢部窯址出土の土器と似たロクロ土師器に注目し、年代的な位置付けや小矢部窯出土土器と共に胎土分析を実施した。胎土・焼成・形態・製作技法から小矢部窯の製品と考えられた土器は胎土分析の結果、ほとんどが小矢部窯址産のものと胎土が違っていた。これらの結果から搬入された可能性も否定できないが、三浦半島には小規模な生産地が小矢部窯以外にも存在しその供給範囲も極限定されていたと想定している（長谷川ほか1983・87・90c）。

中三川昇氏は三浦半島東岸の律令制成立期の土器様相を明らかにする中で、東京湾に面した東岸には北武蔵系の土器群が一定期間存続しているのは、北武蔵の土器組成がそのまま持ち込まれた可能性があることを指摘している（中三川1995）。これらの先行する研究を踏まえて、横須賀考古学会古代研究部会は三浦半島の古代土器の編年研究を発表した（古代研究部会1997、中三川1999）。これによって7世紀中葉から11世紀前葉までの土器編年の見通しと三浦半島の土器群の特色が明らかにされた。律令成立期から奈良時代前半までの北武蔵とのあり方、また、その後の相模との関係、さらに平安時代の三浦型甕（「類製塩土器」）やロクロ土師器といった特色のある土器群の存在が明らかにされた。器種ごとの型式学的検討が不十分なことや三浦型甕の機能は検討の余地があるとしても、現時点での研究成果が出されたものとして評価できる。

土器の様相とその意味

相模の土器様相の特色について星野氏は奈良・平安時代の土師器は相模国内ではほぼ同一の様相であることを指摘している（星野1977）。それらの土師器について筆者は器形、調整技法、胎土、色調の違いから「相模型」という名呼称を提唱した（河野1976）。この時代の土器群のうち明瞭に分けられるものは系統の違いでしかも生産地の差であり、その分布は律令制との関連があるのではないかと考えて指摘したものであったが、始まりの時期や概念規定さらに律令制との関係が追求が不十分なままの提示であった。

「相模型」土器の出現については、古墳時代の土器との関連や製作技術から検討されてきた（長谷川1983a・91、國平1986・92、大屋1989）。個別遺跡の出土土器だけで考えるのではなく複数遺跡の土器のあり方を踏まえて系統的に把握するのが理解しやすいと思われる。

「相模型」の土師器は相模国に主体的に分布しているが、一部は周辺の諸国から客体的に出土している。

これを検討した田尾氏は時期的には8世紀後半から9世紀始めに土器の移動が目立ち、その分布は当時の交通路との関係が深いとしている（田尾1994）。

田尾氏は土器の分布から相模国域に対する律令的な支配体制の成立とその地域性を探っている（田尾1999b）。相模型の甕が成立する前の7世紀第3四半期までの整形技法の違う土師器甕（ハケ調整とケズリ調整）の分布範囲の境は奈良・平安時代の余綾郡と大住郡の郡界にほぼ重なり、それが師長・相武両国造の支配領域を反映すると推定している。また、7世紀末から8世紀初頭の土師器坏の分布は行政区画としての相模国域とは合致しないが、相模型の坏が成立する8世紀第2四半期以後には三浦半島を除いた相模国域全域に広がり、一部は武蔵国の国府域でも出土するようになる。三浦半島で相模型の坏が主体になるのは8世紀第4四半期から9世紀前後であるが、このような土器分布からみた相模国の統一とそれを支えた土器の生産体制の整備は相模国府の体制が整備された結果であるとしている。律令体制下の相模国における整備の具体的な姿をどのように捉えるか、その詳細が検討課題として残されている。

長谷川氏は関東地方の煮炊具を述べる中で相模国について甕の製作技法の特色、器形の種類にふれた後、相模一国に分布し国内の東部と西部では製作技法が微妙に違っていているとしている（長谷川1996）。土師器坏も同一時期で東西で大きさが微妙に違うといわれているので、残された課題の一つといえる。

また、長谷川氏は「まず編年ありきの立場で分析を進め、その後で編年に歴史性を付与しようとした方法」を排し、土器様式の変遷とその意味を明らかにしようとした（長谷川1991）。相模国の土師器坏は古墳時代の伝統を受けつつ須恵器をモデルとして変遷し、土師器坏が大きく変化した730年頃に律令機構の中で相模国独自の対応があったとして「律令的土器様式」が成立し、さらに平安時代に土師器坏が前代の様式から逸脱したのは律令制の動揺が反映しているとしてそれを「在地的土器様式」として把握した。

個別土器

羽釜については田尾氏が研究動向を踏まえて相模での状況を述べている（田尾1990）。相模での羽釜の出現は10世紀中葉ころで、整形技法は「相模型甕」と同じで在地産がほとんどである。鍰の付け方や形態からは甲斐や駿東地域との共通性がみられ、口縁形態は幾つかのに分けられるが、それらが同じ時期に混在し使用されている。分布は周辺の地域と交流が多い官衙やその周辺の遺跡、地域での拠点的な集落などに多くみられるとされている。羽釜は在地の土器生産に取り込まれた新しい器種として生産された土器といえる。

この他の在地産の土器には平塚市内で多出する土師器甕の底部周辺を利用した木葉底坏、同じく平塚市内から多く出土する内面に放射状の暗文が施される場合のあるロクロ高台付土師器碗などがあり、今後の検討が期待される。

まとめ

奈良・平安時代の相模国の在地産の土器編年は大筋の流れはすでにほぼ確定し、最近の資料の蓄積によって細部を検討する段階に入っている。しかし、既存の編年体系を検討することなくそれに安易に依存するだけでなく、新しい資料で編年全体を基本的な方法で検証してゆくことも忘れてはならない。また、三浦半島で行なわれたような地域的な編年を構築し、地域間さらには遺跡間の差異を検討してゆく必要もある。

なお、編年研究は考古学研究の一ステップであるが最終的な目的ではない。編年至上主義に陥ることなく長谷川氏が実践しているように大きな観点から解釈していくことも今後の課題である。（河野喜映）

引用・参考文献

- 岩崎卓也 1967.4 「真間式土器小孝」『大塚考古』8
- 河野喜映 1976.5 「鳶尾遺跡出土の土器編年試論－歴史時代を中心として－」『神奈川考古』第1号
- 星野達雄 1977.2 「いわゆる「国分式土器」について」『原始古代社会研究』3 校倉書房
- 國平健三 1979.3 「Ⅰ～Ⅵ期の土器編年について」『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15
- 明石 新ほか 1981.3 『中原上宿』中原上宿遺跡調査団
- 國平健三ほか 1983.1 「奈良・平安時代の諸問題－相模国と周辺地域の様相－」『神奈川考古』第14号
- 市川正史 1983.3 「第1節 出土土器について」『向原遺跡 第6分冊』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
- 長谷川厚ほか 1983.3 a 「4 相模型の土師器杯について」『杉田大谷遺跡』杉田大谷遺跡調査団
- 長谷川厚ほか 1983.4 b 「ロクロ使用の酸化焰焼成の土器について」『神奈川考古』第15号
- 小島弘義ほか 1984.3 『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団
- 小島弘義 1985.3 「土師質土器の実態とその編年」『四之宮高林寺Ⅱ』平塚市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 國平健三ほか 1986.2 「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考古』第21号
- 國平健三 1986.4 「相模型杯の成立過程をめぐる土器様相」『神奈川考古』第22号
- 長谷川厚ほか 1987.12 「三浦半島の古代遺跡における小矢部窯址産土器の同定（1）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第31号
- 滝澤 亮ほか 1988.3 『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書 Ⅰ』海老名市教育委員会
- 大屋道則 1989.5 「相模型杯の成立過程」『土曜考古』第14号
- 小島弘義 1990.3 「Ⅱ諏訪前A遺跡第3地区」『梶谷原・高林寺遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ16
- 大屋道則 1990.3 「中田以前の土師器研究－編年研究の原則と分類方法の変遷－」『研究紀要』第7号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川厚 1990.3 a 「第Ⅳ章 調査成果のまとめ（1）住居址出土土器の様相の整理、（2）出土土器の編年と組成の特質」『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
- 長谷川厚ほか 1990.3 b 「三浦半島の古代遺跡における小矢部窯址産土器の同定（2）」『神奈川考古』第26号
- 田尾誠敏 1990.9 「相模の羽釜」『東海大学校地内遺跡調査団報告1』
- 長谷川厚 1990.12 c 「土器について」『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
- 長谷川厚 1991.5 「東国における「律令的土器様式」の成立と展開について－相模国の様相からみた東国での適用と方法論について－」『古代探叢Ⅲ』
- 國平健三 1992.3 「「相模型杯」出現期の意義」『神奈川県立博物館研究報告－人文科学－』第18号
- 田尾誠敏 1994.3 「越境する相模型土器」『東海大学校地内遺跡調査団報告4』
- 中三川昇 1995.11 「三浦半島東岸地域における律令制成立期前後の土器様相について」『横須賀考古学会年報』30
- 長谷川厚 1996.9 「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」『古代の土器研究－律令的土器様式 西・東4 煮炊具－』古代の土器研究会
- 古代研究部会 1997.6 「三浦半島における歴史時代土器の研究（1）」『研究紀要』第1号 横須賀考古学会
- 中三川昇 1999.2 「地域研究の成果－古代－ 土器様相の特色とその背景」『考古学ジャーナル』No441
- 田尾誠敏 1999.3 a 「第Ⅳ章 考察 第1節 古代（2）土器・陶器の変遷と王子ノ台集落」『王子ノ台遺跡 第Ⅱ巻 歴史時代編』東海大学内校地内遺跡調査団
- 田尾誠敏 1999.3 b 「土器からみた「相模」の成立過程」『大磯町史研究』第6号

9. 搬入土器の研究

はじめに

奈良・平安時代に、神奈川県内へ持たられた他地域産の土器、すなわち搬入土器に関する研究足跡を振り返ってみる。ここで扱う搬入土器とは、土師器(甲斐型土器、畿内産土師器、その他)、須恵器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉・緑釉陶器)などを指すものとする。ところで、搬入品の性格には流通物資として大きく威信材と生活必需材があり、その入手主体層はそれぞれ貴顕と民衆に二分されるといえる(宇野1997など)、県下における総体的な出土量から鑑みると、前者には畿内産土師器・奈良三彩・緑釉陶器が、後者には甲斐型土器・須恵器・灰釉陶器などを充てて考えることが出来るであろうか。もっとも、須恵器や灰釉陶器の製品のなかには仏器的器種もあり、また特に古相の灰釉陶器には威信材の性格をも付与することが可能と思われるので、厳密に区分することは困難である。そのため、以下ではさしあたり土師器・須恵器・施釉陶器に区分して、各々の研究状況を見ていくことにしたい。ただし、これらの製品の各生産地における研究蓄積は既に膨大な域に達しており、その一つ一つを解題するには与えられた紙数では到底扱えるものではない。したがって、ここでは県下出土資料を扱った論考を中心として、研究の現状と問題点を指摘するに留めたいと思う(生産地の研究状況については、『研究紀要5』に掲げた文献目録を参照願いたい)。

また、神奈川県は古代行政区分の相模国と武蔵国南部を包括しているため、南武蔵地域在地の土器についてはここでは除外しておくこととする。

まず、各種搬入土器の出土様相を概観する前提として、昨年『研究紀要6』で報告した「国府・郡衙の研究」とも一部重複するが、搬入経路となる古代交通網の復元的研究の現況に目を通しておく必要がある。1997年1月に、藤沢市教育委員会より『神奈川の古代道』が刊行された。そこでは、文献史学・歴史地理学・考古学等の学際的研究成果によって、限られた史資料を駆使して古代道路網の復原図が呈示されている。報告者も述べているように、その一部は大胆な推測を加味しており、今後特に資料の増加が見込まれる考古学的情報如何によっては、ここで呈示された復原図は常に見直しを計っていく必要にはあるが、今日における研究の一つの到達点を示しているといえる。一方、中村太一氏は律令法に規定された交通制度が陸上交通編成を基調としたなかで、国府・郡衙が水上交通路をも視野に含めて立地するという全国的な動向から、地方官衙が関与した地域的な水上交通が法の枠組みの外で編成・運用されたことを強調する。その中で、相模川の河口部を国府の外港と位置づけ、同水系の河川交通に積極的評価を与えていることは興味深い(中村1994)。このように、物資の搬入経路は水陸を問わず存在していたことが想像される。

土師器

土師器のうち、まず甲斐型土器に関する研究としては、田尾誠敏氏による下記の一連の論考が挙げられる。

1991.9 「甲斐型坏の初相」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2

1992.5 「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨懸考古学協会誌』第5号

1992.11 「関東地方出土の甲斐型土器—その分布と年代—」『甲斐型土器—その編年と年代—』

1995.2 「相模地方の甲斐型土器覚書Ⅱ」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5

1997.3 「相模湾沿岸部出土の甲斐型土器素描」『上ノ町・広町遺跡』

田尾氏によると、神奈川県内における甲斐型土器の分布は、相模湾沿いとそこから遡る相模川・花水川など

の河川流域に集中する。その状況から、搬入ルートは東海道経由の陸路というよりはむしろ、甲斐－富士川－駿河東部－駿河湾－相模湾－相模国内各河川河口という海上・河川交通を指向し、背景には商品としての流通が考えられるという。またその時期的動向は、後述するように東海地方産の須恵器の供給が減少する8世紀後半に搬入が開始され、その後は武蔵国諸窯の須恵器製品の普及とともに増加するが、灰釉陶器が普及し始める9世紀半ば以降を境として出土量は著しく減少する。このことから甲斐型製品の流通は、須恵器・灰釉陶器といった他の商品の搬入動向と連動した動きの中で展開したことを示唆した。

畿内産土師器に関しては、全国的な動向をまとめた林部 均氏による下記の研究があり、神奈川県内の出土事例にも若干触れている箇所がある。

1986.9「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号

1992.3「律令国家と畿内産土師器」『考古学雑誌』第77巻第4号

これによれば、県内では横穴墓、集落址、国府・郡衙等を中心として7地点で22個体分の出土例が報告されている。分布域は主として相模湾沿岸部に集中し、年代幅は飛鳥Ⅱ～平城Ⅲ期におよぶ。坏・皿・蓋・高坏など多様であるが、とりわけ平城Ⅰ期の段階には器種・量ともに増大するようである。これは、神奈川県のみならず東日本全般的にみられる傾向といえ、国府や郡衙の設置に際して、律令国家による地域支配再編成の具現化の一端であるとしている。

土師器の他製品としては、駿河東部・北武蔵・房総地域産の土器や内黒土器などがある。駿東型土器は県西部、北武蔵・房総地域産の土師器は三浦半島を中心とした地域に分布が偏在する傾向が認められ、隣接地域間での交流を示すものと思われる。また、内黒土器については房総地域や東山道沿線の信濃・上野・下野国が生産地の候補として想定されるが、厳密には同定出来ていないのが現状である。甲斐型土器、畿内産土師器、内黒土器は胎土・色調・硬度等の点で、在地産の土師器とは明確に区別出来る特徴を備えているのに対して、破片では分別・抽出が困難な他地域産の土師器が、実は意外に見落とされている可能性はあるようにも思われる。例えば海老名市上浜田遺跡や秦野市草山遺跡では、在地には認められない丸底を呈した小型甕が単発で発見され、それぞれ畿内地方、遠江から尾張・近江地方産の製品である可能性が示唆されているが(國平1979、長谷川1990)、これらは個体自体が比較的良好に遺存していたからに他ならない。またこうした他地域産土師器がごく少量搬入される背景は、資料上の制約もあって不明な点が多い。

須恵器

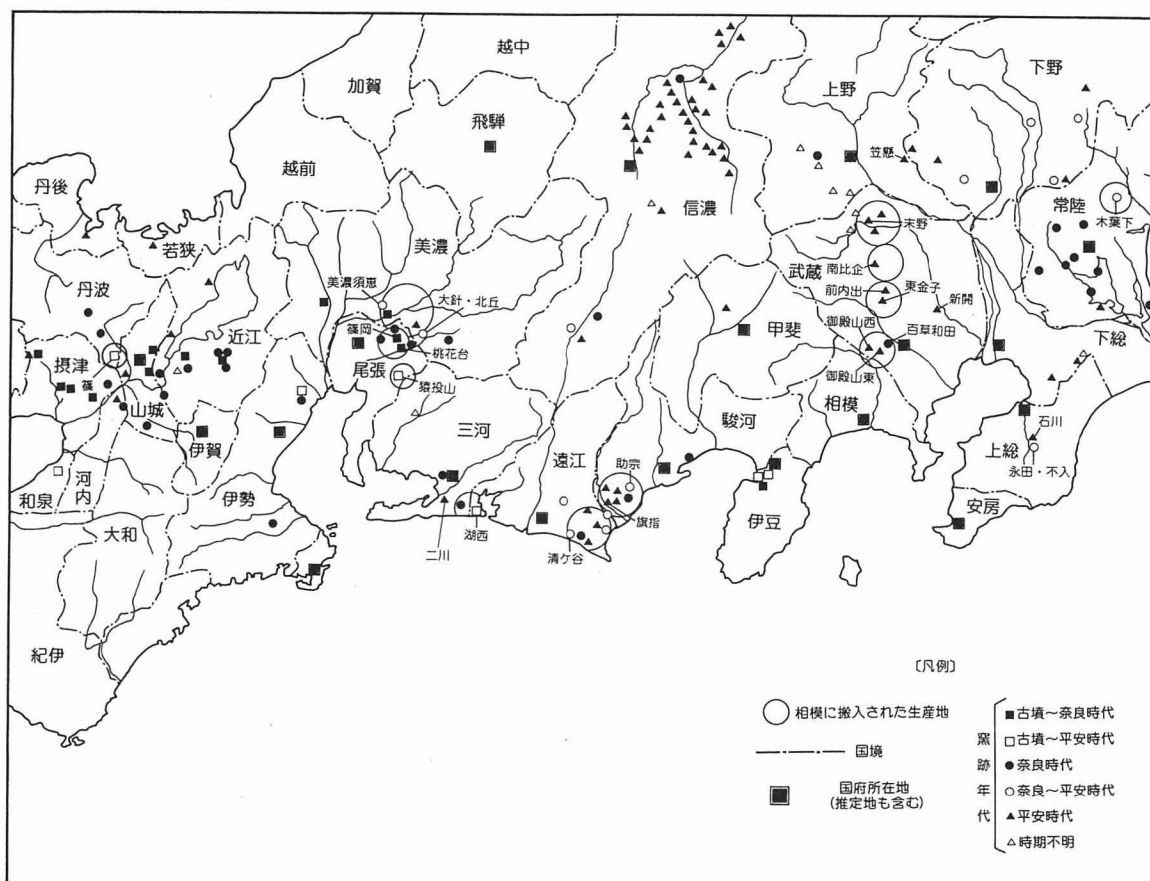
次に、須恵器の研究状況について記す。これまで相模国内には須恵器を生産した窯跡は存在しないとされてきたなかで、近年、武蔵・相模の国界の位置づけ如何によっては、南多摩窯跡群の一部が相模国に帰属するという見解が出されている(河野1996)。しかし、相模国内における須恵器の出土地や分布などからは、流通体制を完備した相模国府主導による須恵器生産を否定する意見もあり(田尾1999など)、また県下で出土する須恵器には南多摩窯跡群以外の製品も含まれているので、ここでは搬入土器として扱うことにする。

県下に搬入された須恵器の生産地の推移としては、8世紀前半以前は湖西古窯址群を代表する遠江国産の製品、8世紀後半になると駿河国助宗古窯や武蔵国北部比企地方の諸窯製品、さらに9世紀前半(御殿山37号窯式期)以降には南多摩窯製品が広く流通するという理解が一般的である(田尾前掲1995)。しかし、必需材として大量に搬入されるためであろうか、土器全体に占める須恵器の構成比率が、県内各地域間で異なることが指摘されている程度で、その具体的な供給元の同定は未だ果たされていないのが現状といえる。

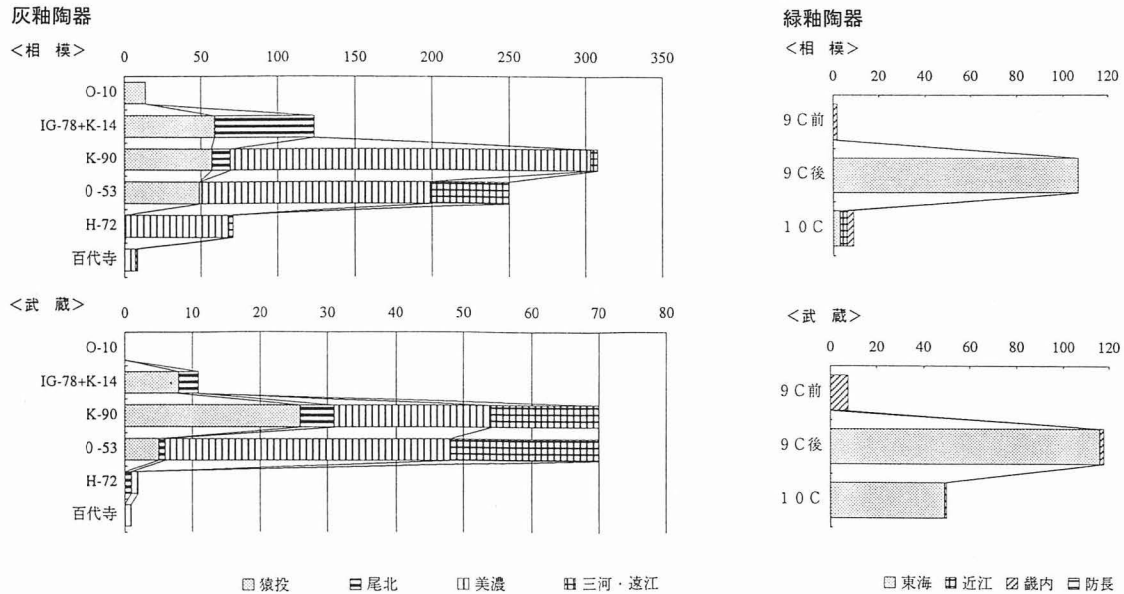
また、土師器と同様に、上に記した産地以外の製品がごく少量搬入されるケースもある。須恵器の諸製品のなかには、平城V期以降に出現し長岡京期の9世紀初頭に盛行する、いわゆる「壺G」と呼称される長頸壺がある。調庸物の堅魚煎汁・甘葛煎汁用容器、軍需用品(水筒)、仏教用具(花瓶)等、用途をめぐっての議論は百花繚乱を呈するもので(山中1997、佐野1998など)、伊豆・駿河地方や北武蔵地方の限られた地域で生産されている器種である。県内でも幾つかの出土事例があり、仏教系関連遺物として仏鉢形土器、水瓶・浄瓶、手付瓶他など(灰釉陶器を含む)の器種とともに、富永樹氏によって昨年集成された(富永2000)。だが、須恵器はそのような特殊な器種に限っての集成作業が始まった段階であって、県下に広く普及している日常食器としての流通実体は未だ不明確といえる。

施釉陶器

最後に、施釉陶器の研究状況について触れておく。発掘調査報告書等において個々の遺跡から出土した資料を中心に分析を加えた考察を除くと、体系的な研究は斉藤孝正・高橋照彦両氏の仕事が挙げられる程度で数少ない。斉藤氏は平塚市四之宮地区を中心とした、県内の主要な遺跡から出土した灰釉・緑釉陶器を概観するなかで、特に10世紀前半(折戸53号窯式期)以降の灰釉陶器には、猿投産の他に遠江産の製品が一定量含まれていることを明言した。また、神奈川県全域における施釉陶器の搬入量の多さは、東海道諸国のなかでは生産地諸国を除く最大の消費地になる可能性を指摘する(斉藤1993)。一方、高橋氏は東国全域における施釉陶器の流通実体を調べ、施釉陶器が搬入される時期や量、供給元が東海道諸国と東山道諸国の間で異なる様相を明らかにした。施釉陶器の流通量は産地からの距離に伴い通減する傾向にあるが、灰釉陶器について



第6図 相模に搬入された須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器の生産地分布(田尾1998より)



第7図 県下出土の灰釉・緑釉陶器の時期別変化（高橋1994より・一部改変）

は相模国は東国では信濃国に次ぐ量が搬入されている集計結果も示した(高橋1994)。その他、筆者は緑釉陶器について県下全域における出土様相をまとめたことがある。そこでは、緑釉陶器は官衙や交通上の拠点を中心に分布し、特に四之宮地区には県内全域の7割を越える量が集中する傾向を明らかにした(依田1998)。

まとめ

以上述べてきたように、搬入土器をめぐる研究状況としては産地の特定が可能な製品、もしくは威信材的性格が強く、その分布に何らかの傾向を見出し易い製品に限っては、幾つかの論考が発表されている。その一方で、日常雑器として大量に流通していた須恵器・灰釉陶器については、産地分析や統計的研究などは進んでおらず、搬入の実態は不明確というのが現状であろう。各製品の生産地側での調査・研究が進展してきており、これまでに蓄積された資料を今一度再検討するなど、今後に残された課題は多い。(依田亮一)

引用・参考文献（※本文中に明記した文献を除く）

- 國平健三 1979.3『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15
 長谷川厚 1990.12『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
 齊藤孝正 1993.12「神奈川県下の灰釉陶器・緑釉陶器—平塚市を中心として—」『三浦古文化』第55号 三浦古文化研究会
 中村太一 1994.3「古代東国の水上交通」『古代東国の民衆と社会』名著出版
 高橋照彦 1994.9「東国の施釉陶器」『古代の土器研究3 施釉陶器』古代の土器研究会
 河野喜映 1996.5「多摩丘陵南側の武蔵と相模の国境について」『多摩考古』26 多摩考古学会
 宇野隆夫 1997.2「律令制下の交易」『考古学による日本歴史9 交易と交通』雄山閣出版
 山中 章 1997.11「桓武朝の新流通構造—壺Gの生産と流通—」『古代文化』vol.49 財団法人古代学協会
 依田亮一 1998.5「神奈川県出土緑釉陶器の諸様相—器種・産地別分類と年代的 position 付けの再検討—」『神奈川考古』第34号
 田尾誠敏 1998.7「土器から見た相模国府」『相模国府とその世界』平塚市博物館
 佐野五十三 1998.12「須恵器花瓶の成立—仏の手から婆娑の世界へ—」『静岡県考古学研究』30
 田尾誠敏 1999.3「土器・陶器の変遷と王子ノ台集落」『王子ノ台遺跡Ⅱ 歴史時代編』東海大学
 富永樹之 2000.5「神奈川県」『古代仏教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会
 佐野五十三 1998.12「須恵器花瓶の成立—仏の手から婆娑の世界へ—」『静岡県考古学研究』30
 田尾誠敏 1999.3「土器・陶器の変遷と王子ノ台集落」『王子ノ台遺跡Ⅱ 歴史時代編』東海大学
 富永樹之 2000.5「神奈川県」『古代仏教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会

おわりに

奈良・平安時代研究プロジェクトは、考古学の視点から県内における古代史研究に関しての成果並びに今後の課題を「神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究—その歩みと今後の視点—」と題して3年計画でまとめた。まず、『研究紀要5』で研究史年表を提示した。年表は官衙跡・寺院跡・集落遺跡とそれらから発見された出土遺物とに四分類し、論文及び著作を年代順に編集した。さらに、主要遺跡の発掘調査やシンポジウムも併せて掲載した。続いて『研究紀要6』から各論に入り、国府の研究、郡衙の研究、集落構造の研究、集落立地の研究、集落変遷の研究を、『研究紀要7』で国分僧寺・国分尼寺の研究、豪族の寺院と山寺、堂、在地土器の研究、搬入土器の研究をそれぞれまとめた。各論は恣意的に選択して、研究の進捗や展開の軌跡を整理し、今後の課題について論じた。

1970年代前半から大規模な開発事業に伴って集落遺跡の面的な発掘が開始され、70年代後半からは市街地化の進む平塚市内、国府域の発掘が頻繁に行われるようになった。そしてそれらの遺跡から出土した膨大な資料によって土器研究や集落研究が進んだ。80年代後半から国分僧寺跡・国分尼寺跡とその周辺の調査が本格的に進められ、90年代後半からは郡衙跡や寺院跡の確認調査も手がけられている。調査量の急増からみて当然とはいえ、20世紀第四四半紀ほど県内ほぼ全域で考古学的研究が目覚しく進んだ時代はないであろう。しかし、各論で述べたとおり21世紀に向けて課題も数多く残されている。

具体的には、大住国府の存在は明らかになったが、国府域の範囲確定にとどまり国庁部分は確認されていない。大住国府以前の国府の存在やその有力な候補地である高座国府の有無についても議論は分かれる。国分僧寺・国分尼寺については寺域すべてが国指定史跡とされていないこともあって調査方法の確立が望まれる。開発に伴う都筑郡衙跡・鎌倉郡衙跡の発掘調査を皮切りに最近活発に確認調査が進められている郡衙や寺院に関しても資料の増加が待たれるところである。集落研究も集落内の時期変遷は呈示したが各遺構の機能については未だ明確にされておらず、従って集落の性格もおぼろげな評価にとどまっている。他地域であれば当然論じられるべき生産関係や交通関係の遺跡について今回言及していないが、それは該当する遺構・遺物が極めて少ないという神奈川県の特性に起因している。出土遺物についても土器以外は扱っていない。相模川によって東西に二分された東岸域と西相模、さらには三浦半島に関してそれぞれ地域性が認められる。東岸域に関しても武蔵国と相模国との差違が明確ではない。生産地である南多摩窯址群に近い相模原市周辺は須恵器が土師器を圧倒して出土しており、土師器が出土量の大半を占める他の地域との比較が必要であろう。そもそも相模型の土師器がどこで生産されたのかさえ判っていない。また、威信材と生活必需材という視点から土器以外の出土品を見直すことも課題の一つであろう。土器のように遺存率が高く現在まで残された遺物に対して、廃棄後大半が失われたと思われる希少な遺物と元来希少だった遺物との比較検討も必要であろう。木製品の出土する低湿地の遺跡の今後の調査にも期待したい。

新世紀に入り、経済不況が深刻化し社会構造の変革が叫ばれている。前世紀末から環境保全にとりわけ注意が払われる傾向が顕著になった。大規模開発とともに進んだ大幅な地形改変を伴う大規模調査時代は終焉を告げようとしている。今後はたとえ開発に伴う発掘調査であってもこれまでの調査例を生かして、その遺跡の特性を予見しながら調査を進めるべき段階に入っていると考えられる。

最後に、本プロジェクトのかなりのメンバーが参加している「相模の古代を考える会」の会員諸氏、特に明石新・荒井秀規・田尾誠敏・中三川昇の各氏からは研究史年表に関連した資料収集をはじめ一方ならぬ多くのご教示・ご指導を得た。記して感謝したい。